

## 価値ある作業との出逢いから、本来の自分を取り戻し、自宅退院に至った一症例

青梅三慶病院リハビリテーション科

○ 作業療法士 <sup>ワタナベ ユウタ</sup> 渡邊恒太

【はじめに】今回、陳旧性圧迫骨折(診断名:腰椎圧迫骨折)を呈した80代前半の女性を担当する機会を得た。入院初期でADLは自立されるも、退院に対して前向きでない発言が多く聞かれた。価値ある作業に出逢い、自宅退院までに至った経過を報告する。

【ケース紹介】80代前半。入院経緯は腰部の痛みから体動困難になり、そのままA病院に入院する。その後、リハビリ目的にて当院に転院される。

生活歴は40代まで教師をされ、その後母親と死別された事をきっかけにうつ傾向があった。教師の仕事を引退してからは家事を行いながら絵画、書道、ゲートボールなど、趣味を楽しんでいた。

【作業療法評価】入院初期より腰部の痛みの訴えは少なく FIM:124/126点。独歩にて病棟フリー。認知機能面においても細かなスケジュールなどを自身で記載し管理する事が出来た。しかし感情失禁が度々あり、生真面目な性格でストレスを溜めこみやすい傾向が見られた。「旦那に家事を手伝わされる事が嫌」「家に帰っても召使いみたいなものだから、入院生活の方が良い。退院したくない」など、退院に対してネガティブな発言も多く聞かれていた。

【初期の介入】OTでは介入初期、ケースの家事に対する認識(家事=召使い)に迷いながらも、自宅退院に必要と考えたため、家事動作の練習を実施した。すると、精神的に落ち込む事が多くなり、家族を通して不満の訴えも聞かれるようになった。

【介入計画の再考】傾聴での対応をこころがけ、ナラティブスロープを作成した。すると、ここ数年で孫が遊びに来なくなった事・旦那との時間が増えた事・橈骨を骨折し自信を失った事が影響し、価値ある作業遂行機会(楽しみ)の欠如が自己有能感の低下につながっている事が明らかになった。よって作業療法では、価値ある作業を見つけケースらしさを取り戻せるよう援助を行った。また、ケースの悩みの傾聴や人的環境(旦那・長女)への働きかけも並行して援助を行った。

【介入経過】介入計画の再考後、入院時に見られた感情失禁は徐々になくなり、不満に囚われる様子は減少していった。その後、エレクtoonに出逢い、OT以外の時間でも自主的に取り組むようになった。他患や旦那の事で不安や悩みに直面した際は、エレクtoonに没頭しストレスの回避を図る事も多くなった。

退院時の担当者会議では「私はしたくない事をするために歳をとったわけじゃありません」「エレクtoonがしたいです」と自身からケアプランを提案された。

【考察】介入の再考後、ケースはエレクtoonとの出逢いから内在化した葛藤を発散する事が出来、自己有能感の向上につながる事となったと考える。エレクtoonはケースの教師時代を思い起こさせる作業であり、幼い頃の長女・孫との時間を思い起こさせる作業でもあると考える。そのために、ケースらしさを再獲得するきっかけになったのではないかと考える。OTの傾聴やケースの主体性重視・価値ある作業を共に探索する姿勢が、信頼関係の構築・挑戦意欲の向上につながり、ケースにとって価値ある作業(エレクtoon)との出逢いに至ったのではないかと考える。

ナラティブスロープの作成で介入がスムーズになった経験を経て、作業療法の介入で語りを重視する事は、援助の上で欠かせない事を再認識させられた。

【退院後】訪問リハビリ・通所リハビリを利用し、ケースのストレス・不安軽減を図っていった。